

しん ひえうおん
申 惠媛 氏 (宇都宮大学国際学部助教)

略歴

1990年ソウル生まれ、2001年来日。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。博士（学術）。東京大学教養学部附属教養教育高度化機構特任助教を経て、現在、宇都宮大学国際学部助教。専門は社会学（移民研究、都市社会学）。

授賞作『エスニック空間の社会学—新大久保の成立・展開に見る地域社会の再編』
(新曜社、2024年1月)

要旨

本書は、東京都新宿区大久保地域の一角における、エスニックな観光地「新大久保」の出現による「地域社会」の変容ないし再編の過程の分析を通じて、あらゆる人々が移動を経験し、地域を越えて関係を結ぶ現代における「地域社会」の捉え方を探った研究である。

事例となった大久保地域は、1980年代後半以降、日本有数の外国人集住地域として、中でも「新大久保」と呼ばれるエリアは2000年代以降「エスニックな観光地」として、エスニシティの異なる居住者、ビジネス経営者、観光客など多様なアクターに対して開かれてきた地域である。このような大久保地域や「新大久保」は従来、移民／エスニック・コミュニティの発展型として、または「多文化共生」の現場たる外国人集住地域として注目されてきた。しかし、近年の観光地化に伴う地域の変化は、これら既存の枠組みでは十分に捉えられない。そこで本書では、移動性・開放性を鍵として、観光地「新大久保」出現後の大久保地域を捉えるための分析枠組みを設定し、1980年代後半以降の状況を描出した。

本書の特徴は第一に、「新大久保」出現後の大久保地域を、移民／エスニック・コミュニティの発展型ではなく、開かれた「エスニック空間」として捉えた点である。これにより、何らかのエスニシティの空間的集中が観察される地域に関わる、より多様な人々が織りなす社会関係に注目することが可能になる。外国人集住地域研究における「多文化共生」は、こうした社会関係の代表的なものとして挙げられる。しかし、従来は居住者間の関係に焦点が当たられ、移民の定住化やそれを基盤とする共同性の構築といった移動性の低減が、エスニック空間化に伴う葛藤・軋轢の安定化を図る方法として想定してきた。これに対して、本書の第二の特徴は、人々の移動を一時的な例外ではなく常態的な、エスニシティを問わず誰もが行いうるものとして捉える視座に立った点である。このような見地からすれば、移動性の高低による葛藤・軋轢の生起とその安定化は、繰り返し、決まった方向性をもつことなく起こりうる。本書はこの点に注目し、居住（定住）を前提としてきた従来の「地域社会」概念を再考し、移動性をもつ多様な人々の「共在」による相互作用とそれが生み出す社会関係の形成・変容を通じた動態的な秩序形成過程という分析枠組みを提示した。

大久保地域-「新大久保」では、外国籍人口の急増、エスニック・ビジネスの集積とこれを主要資源とする急激な観光地化、観光地的側面の一時的衰退と再活性化といった局面に際し、都度新たな葛藤・軋轢が生起し、その安定化が図られてきた。本書はその過程を時系列に沿って描き出している。まず1980年代後半からの外国籍人口の急増や「国際通り問題」に際しては、居住・生活空間としての性格を強固に保持し、一部葛藤をはらみながら「並存」する形での秩序形成が見られた。しかし、2000年代における観光地「新大久保」の出現は、居住を軸とする既存の社会関係と区別される重層的な社会関係レイヤーの形成をもたらし、居住者と観光客間の葛藤という新たな地域課題を生じさせた。これに対しては、2010年代初頭以降の観光地的側面の一時的衰退・再活性化を経て、韓国系・マルチエスニックなビジネス経営者らによる、社会関係の重層構造の安定化を通じた秩序形成が図られた。これは当該エスニック空間を構成する人々がもつ移動性・開放性を前提とする点で、居住（定住）を主軸としてきた「地域社会」の積極的な再編として見出される。

以上のように本書は、定住化を通じた既存の社会関係の維持という従来型の秩序形成にとどまらない、絶えず緊張関係とその均衡への新たな再構成が生起し続ける動態的な「地域社会」の、ひとつのあり方を示したものである。